

藤本 志帆  
FUJIMOTO Shiho



それでも  
紙本着彩、岩絵具

## それでも

目に見えているものが自分の心を映しているとは限らない。

これまで私は、自分という存在を出発点として作品を展開してきた。それは時に、死についての捉え方や、自分にとっての幸せ、孤独の中の寂しさなどである。生まれた時から積み重ねた、普段は口にしない、心の奥底で燻っている自分のネガティブな部分や言い表すことの出来ない日常的に起こる感情の変化を表現している。

このように作品を制作していくことで、自分の心を理解し、自分という存在を自ら解き明かしていくことに繋がるのではないかと考えている。過去の記憶を辿り、自分自身を振り返りながら今の自分と比較して、感情を作品にして昇華することは、過去の私への慰めにもなる様に感じている。

今回の作品でも、これまで通り、今の自分を表現した。後で振り返ってみたとき、今の私の作品が、人生の節目となるようにしたかったので、テーマは「社会の中で生きる私」である。

現代の社会では、その社会を維持するために人々は動き続けているように思う。一方で、私は、その社会の歯車として生きていくことに疑問を抱いている。また、その社会の仕組みから取り残されているように思える。目紛しく経過する時と変化する社会の中で、自分自身の中に暗く、黒いものが渦巻いている。私の内面とは対照的に私の傍で、世界は眩しすぎる光を帯びているように見える。

《それでも》は、そんな厳しい現実の中で自分の暗い感情を敢えて隠すように表現した。

記憶の中にある過去の、苦しくも懐かしく、愛おしい故郷の風景を礎にして描いた情景は、私が見ていて美しく感じた動物や植物の形から構成されている。

私自身の心の有様をありのままに描くのではなく、自分の傍に存在して見える世界をただ淡々と美しく表現することで、私の感情が作品に昇華される。